

Wolter, Allan B., O. F. M. (ed. M. M. Adams): *The Philosophical Theology of John Duns Scotus.*

Cornell University Press, 1990, ix + 356 p.

小川量子

本書は、Wolter 神父の四十年以上にわたるスコトゥス研究を称えて、それまでに書かれた主要論文を集めたものである。巻末の業績一覧からも分かるように、著者は長年スコトゥスの数々の著作の批判版とその英訳を手がけ、スコトゥスの著作を現代に甦らせるために多大な貢献をしてきたわけであるが、本書も、スコトゥスの哲学的思想のほぼ全域にわたる主要な問題を扱い、現代哲学との関連からスコトゥスの哲学の現代的な意義をとらえなおしている点で、スコトゥス研究への格好の入門書と考えられる。しかし、スコトゥスの原典批判版が完成されていない現在、写本文献を吟味してスコトゥスの思想を精密に検証した彼の研究は、今なおスコトゥス研究の最先端をいくものであることは否定できない。その意味で、本書は、文献に照らしてスコトゥスを正確に理解しなおそうとする著者の堅実な研究姿勢に基づくものとなっている。

本書には、新旧あわせて全十三の論文が、内容的に、第一部 形而上学と認識論、第二部 実践理論と倫理学、第三部 哲学的神学に分類されている。すなわち、第一部は、形相的差異および個体化の原理など、スコトゥスに固有な実在論的な立場を認識論との関係から解明したもので、著者は、トマスやガンのヘンリクスなどのスコトゥス以前の思想家とスコトゥスとの思想的連関および差異を探るとともに、ラッセルやパースなど英米系の言語哲学者からもスコトゥスの理論を理解する糸口を見いだそうとしている。形相的差異について論じた第一の論文では、スコトゥス以後しばしば批判的となったこの区別が、歴史的にスコトゥスがはじめて唱えた区別ではないことを明かにし、スコトゥスがこの区別をつねに認識における差別化の可能性との連関から規定している点に基づいて、後代の批判に見られる、いわゆる“存在論的な積み木細工”といった固定的なイメージをあてはめるのではなく、流動的で仮定的な性

格をもつものとして捉え直すべきことを、自ら“スポットライトによる照明”のイメージを用いて説明している。著者は、スコトゥス自身も形相的差異によって実在の構造すべてを十分に語りえると考えていたわけではないこと、概念的に区別される実在的な差異についても、スコトゥスにおいて様々なバリエーションが考えられていることを明かにする。特に問題となる、存在 *existentia* と本質 *essentia* との区別については形相的な差異にも形相性とその内的様態の区別にもあてはまらない区別であると考え、直観と抽象との区別に関連して見いだされる区別ではないかと推測している。スコトゥスの直観について扱った第五論文は、スコトゥスの著作の年代順に、スコトゥスの思想の発展を追い、スコトゥスの直観論を様々な局面から明かにしたものとして興味深い論文となっている。直観の問題は、これまで多くの研究者によってオッカムとの連関などから注目されてきた問題であるが、著者は、スコトゥスの直観論を中世の認識論に対する最も重要な貢献と評価しながらも、スコトゥスの認識論において直観は必ずしも中心的な意味をもつものでないことに注意を促し、スコトゥスの直観論から直接的な実在論を主張する Bérubé 神父の解釈に対しても慎重な態度を示している。

第二部は、従来主意主義という側面が強調され、あまり注目されなかったスコトゥスの倫理思想に光をあてたものである。その第一の論文「超自然的なものへの本性的欲求」では、知性および意志に関して自然本性的なものと超自然的なものをスコトゥスがいかにかに区別しているかが論じられる。すなわち、スコトゥスにおいて、至福は知性にとっても意志にとっても、能力の本性的な受容可能性の面からは、自然本性的なものと理解されるが、実際に至福へ達するのは、あくまでも神の自由な意志によるため超自然的と考えられる二面性を明かにし、スコトゥスでは、超自然的な完成に向かう本性的な欲求の存在から、超自然的な完成である至福の存在が根拠づけられるのではなく、その逆に神が現実に至福へとわれわれを定めたという啓示から、そのための本性的な欲求の存在が理解されることに注目する。次の「スコトゥスの倫理学への鍵としての意志本来の自由」では、意志の自由と倫理性の関係を問題とし、*Encyclopedia of Philosophy* に載せられた「神が意志するから事物は善であり、その逆ではない。それゆえ、道徳的な善は自然的理性が近づきえないものである」という Anthony Quinton のスコトゥス理解が、スコトゥスの立場を端的にあらわすものではないことを明かにしようとしている。著者は、まずスコトゥスが、アンセルムスに従っ

て、われわれの意志のうちに、自己の本性的な完成をめざす利益への性向とは異なる、対象それ自体の完全性のために愛することへ向かう正義への性向を意志本来の自由として認めることによって、たんに本性的な欲求によるのでも、また本性に反するのでもない、実践的理性に従う自由な倫理的行為の可能性を基礎づけていることを示す。さらに、われわれの実践の第一原理と考えられる「神が愛されるべきである」という命法が、神の意志の決定にも先立ち、神の無限な完全性から必然的に帰結する実践的な真理として理解されている点をおさえたい。スコトゥスが十戒の第二部を厳密な意味での自然法としてはとらえず、神の意志によるその免除可能性を認めているとしても、スコトゥスはそれらの法を第一部の原理的な命法にきわめて調和したものとし、神の意志が恣意的に定めたものとは考えていない点を強調する。そして、スコトゥスが自然法を、ストア的な永遠法に結びつけるのではなく、人格的で、柔軟性をもつものに解釈しなおした点を評価している。次の「理性的な能力としての意志」という論文では、知性ではなく、意志が本質的に理性的であるというスコトゥスに帰された逆説的命題について論じたものである。著者は、この命題が実際にはスコトゥス自身のものではなく、スコトゥスが度々批判しているガンのヘンリクスのものであることを指摘したうえで、スコトゥスの「形而上学註解問題集」に即して、自由意志の形而上学的根拠となる自己運動ないし自己規定の可能性がアリストテレスの形而上学との関係からいかに理解されるかを論じている。最後の「意志と道徳性」という論文は、スコトゥスの倫理学の全体像を神の意志の側から簡潔にまとめたものとなっている。

第三部は、本書の題名にも選ばれているように、スコトゥスの神学における哲学的な理解の可能性を探るもので、神の存在証明および神の未来に対する知の問題など、最も議論の多い箇所を扱っている。特に第三部の冒頭に掲げられた「スコトゥスの“神学主義”」という論文は、スコトゥス解釈に大きな影響力をもったジルソンの神学主義 (Theologism) に基づくスコトゥスの学問理解に対する批判となっており、スコトゥスにおける神学と哲学との関係を理解するうえで示唆に富む論文であると言える。ここで神学主義と言われるのは、中世の哲学が神学なしには哲学としても成立しえなかったというジルソンの歴史観に基づく見方として紹介されるが、著者は神学主義それ自体ではなく、ジルソンがスコトゥスの立場を、形而上学ないしわれわれの自然理性だけでは神の存在および神の一性や無限性を学問的に論証不可能とみなし、

蓋然的な論証しか認めない立場と解釈することに対して文献的に批判するのである。すなわち、著者は、ジルソンの解釈が、真作か偽作か論議のある *Theoremata* の部分に基づき、スコトゥスの真作と確定されている他の著作の言表とは明かに矛盾する点を指摘している。そのため、著者は、スコトゥスは、啓示なしには形而上学が「存在」を第一対象とする学として成立しえないと考えたのではなく、形而上学を自然本性的に可能な学として、その神学からの独立性を認めていたことを明かにする。そして、最後にこのようなジルソンの解釈の根拠となった *Theoremata* の部分は、スコトゥスの直弟子で書記をしていたと考えられる John de Bassolis の見解に近いこともつけ加えている。このことは、スコトゥスの死後、すでに直弟子たちにおいて、スコトゥスの立場に反対する立場が主張されていたことをも示し、興味深い。そこで、次の第十一論文では、実際にスコトゥスによる神の存在証明を、主に『オルディナチオ』に即して概説しているが、スコトゥスが論証の体系的な完成のため、少なくとも三度も修正を重ねていることなどから、おそらくスコトゥスにとって最後まで完成したものではなかったと考えられる点も注記している。最後の論文は、本書のために書き加えられたものと思われるが、この「未来の出来事に関する神の知について」という問題は、スコトゥス自身『オルディナチオ』には空白に残している箇所であるため、初期の『レクトゥーラ』と死後弟子たちによってまとめられた *Apograph* しか現在批判版が出ていないが、著者は、スコトゥス自身が目を通したと思われる弟子による『レポルタティオ (パリ講義録)』第一巻の写本 A が *Wadding-Vivès* 版における同箇所のより完全なものとみなされていることから、その写本に基づいて詳細な分析をし、スコトゥスの最終的な観点を探ろうと試みている。

本書の題名が示しているように、著者は一貫してスコトゥスの神学における哲学的な問題に目を向け、スコトゥスがいかに理性的な側面を肯定しているかを明確にしようとしている。そのことによって、直観主義、主意主義、神学主義などの先入観に基づいた従来のスコトゥス理解に対して、スコトゥスの思想の柔軟でバランスのとれた解釈の可能性を示唆するとともに、現代哲学に通じる哲学的な研究への道を開いている点に、本書の意義を見いだすことができると思われる。